

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	九州地方の土器 : 論文
Author(s)	加來, 彪
Citation	龍南, 2 3 2 : 5 1 - 5 6
Issue date	1935-12-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7280
Right	

九州地方の土器

加 來 彪

土器はあらゆる考古學的資料中、最も價值を有するものであることは何人も否定することは出来ないだらう。何故ならばそれは最も普遍的に存する遺物であり且當時の人類が自らの手と篋その他を使用して形成、燒成したものであるから製作者自身固有の技術がそのままに表現せられ延いては、人種や民族の差異をも明瞭に示すのみならず、技術の進歩如何により、その形狀や文様に著しい變化を生じ得るのでその文化階梯、年代の變遷をも雄辯に物語るからである。故に考古學研究者が土器に對する態度は、歴史家の文書記録に對する如く、また民俗學者の傳説、土俗に對するのと同様にその注意を傾注するのであつて、一片の土器は恰も一遍の古文書や一篇の説話の發見にも匹適する。故に土器を以て考古學のアルファベットとなした。ペトリー博士の言も肯かれる。されば土器は凡ての考古學的資料中第一に置かるべき基本的資料であると思ふ。

翻つて我國の石器時代遺物の土器を見るに、先づ量の豊富な點と變化に富んでゐる點では諸外國に決して劣らぬことである。北は千島から南は琉球、臺灣に至るまで殆ど我國の津々浦々に頗る濃密にこの石器時代遺物の土器を發見してゐる。私はその文化の内容に依り二つのグループに分たれてゐる縄文式土器と彌生式土器について考へてみたい。

縄文式土器

我九州の縄文式土器の特質としては、第一に素地は主として精練されてゐない粘土をそのまま使用してゐる。併し末期の精巧なものの中には稀に水箆したかと想はれるものも存する。成形には主として手捏製と卷上製と輪積法とが行はれたらしい。又原始的な轆轤も金石併用時代には使用された跡が窺はれる。焼成火度は低い點からみて頗る原始的な窯か或は爐の中とか或は又凹處に焚火して焼成されたらしく大部分のものは、素地の内部まで火が通つてゐない、従つて色澤は黒色、黒褐色、褐色等々を普通とする。

次に器形には碗形・皿形・鉢形・甕形・壺形等が最も普通に認められる。その他高杯形、釣手形等の奇形に屬するものも發見されてゐる。大さは一定しないが特殊のものを除いては概ね高さと徑とは一致してゐる。小形品では五六糎から大形品では一米内外のものが見られる。厚さも器形の大小によつて異なるが〇、五糎から一糎を標準にしてゐる。次に各部に區分して觀察すると、口縁部は圓形・楕圓形が最も多く極めて稀ではあるが四角形、三角形をしたものもある。肩及び胴は鉢形土器に存する球形に近いものが認められる。底は圓底と尖底と平底とが最も普通に見受けられるもので、又往々臺狀の突起物を附着したものを存する。器形の祖形に就て考へると、野生の果實の如き自然物から發生したものではないかと推定される。

文様に就いて見るに此の土器の文様は頗る變化に富み、原始藝術として遺憾なきまでに發達を示してゐることは、縄文式土器の一特色であると思ふ。最も多く見られる縄蓆文は製作の始めに下に敷いてあつた織物の文が粘土の上に附着したのにヒントを得て、それが漸次進歩するにつれて裝飾文から地文へと轉化したのであらう。裝飾文にも大体二種の捺押法があるやうだ、一つは器具で描刻したもの、他は型で刻んだものである。之等の文様も器形の大小と關係深く、

例へば長大且つ厚手のものにあつては隆起した粗大な文様が用ひられ、小形薄手の土器は流麗な陰刻から成る。又前者には縦文様、後者には横文様式であることも器形に對する描刻の當然の結果であらう。又器に於ける施文部の如何によつてその内容も異つてゐるやうだ、即ち古式（石器時代）に屬するものは未だ充分なる發達を遂げてゐなかつた時代のもので文様に統一がなく、器形の全体に散漫的に施されてゐるやうだ。而るに製作技術の進歩に従つて一定の施文帶が出来それが何時の時代に至つて統一したものか識ることは出来ないが殆んど口縁部に殘留するやうになり、現在發掘されてゐる土器の大部分が之等の完全なる發達を遂げたものの一群であることは言ふまでもない。

さて型式に就ては所謂南方縄文式土器の一グループとして相互に型式の設定や編年を試みるべきであらうが今の自分には到底出来ないことだ。然し大体に於て北九州には此式の土器はあまり發見されることがなく、大分縣國東半島に僅か一二の發掘を見たのみで熊本縣下阿蘇山以南には濃厚となり殊に轟や阿高等は顯著である。更に南方に入ると宮崎、鹿児島縣下に薩摩出水・日向綾村・大隈福山村等が知られてゐる。その他南九州からは凡ゆる處に一二の發掘を見てゐる。此等の南部九州の縄文式土器は、東日本を分布の中心としたものとは異り型式別を以て假定することは出来ない。然し大体に於て類型式に分たれ得ることは確かである。先づ關東地方に見る厚手式末期、又は薄手式に類似する一系統で曲線文の發達したものが存する。又更に極めて特殊な發達をなしたもので熊本縣轟貝塚に見る隆起細帶文や有喜貝塚に見る指頭連點文や細形刻線文土器等がある。何れも九州特有の發達をなしたものである。なほ琉球から出たといはれる土器に細形刻線文の更に形式化されたものがあるのを見たが、之は縄文式土器の西下を物語るものではないからか。唯之だけで南進説を肯定するのではなく先述の指頭連點文や細形刻線文が今尙東日本に發見されて居らぬと聞くからは北進ではなくて西下したものではなからうかと想像したのである。

最後に縄文式土器の祖形は何であらうか？ 之はあまりにも大きな問題ではあるが誰でも抱く共通的な疑問であるか

ら考へて見たい。元來我國は有史以來島國であることは誰しも知つてゐることである。その島國の内にかゝる顯著なる進歩を遂げた該土器が生れ出たと考へられない。然し支那大陸・滿洲・シベリヤ方面から出る土器の中にも此の土器の母胎と考へられるものが未だ發見されてゐない點からみて、何處から！ 何時頃！ 移入して來たかは將來の研究に俟たねばならぬだらう。更に後世の遺品に徴しても同様に連續すべきものがない。結局縄文式土器は悠久なる古代に我國へ渡來し、我國内に於て非常に長い間即ち石器時代から新石器時代を經更に一部は金石併用期にかけて發達を遂げ、東日本を分布の中心とし漸次西日本へと西下傳播したものと想はれる。

彌生式土器

此の土器は前述の縄文式土器と相對立して、西日本をその分布の中心とし新石器時代より金屬併用時代を經更に青銅器時代への過渡期に於て全盛を極めた土器の一群である。

素地は前者と殆んど變りなく成形や焼成等に就ても略同様である。然し概して焼成の火高が高かつたらしく、比較的堅硬で色澤は赤褐色或は褐色を呈するを普通としてゐる、又南部九州では頗る進歩した遺品が見受けられ、轆轤の使用も行はれたらしい。例へば甕棺の如き薄手大形品が出てゐるのはその好例である。

器形に就ても大体に於て形狀の變化に乏しく且つ複雑でない。最も多いのは壺形で口縁部がやゝ外に反轉し頸部が比較的長く、胴部は膨脹して圓味を帶び、底は縮約して恰も無花果の如き形に似た所謂彌生式土器の特徴を示してゐる。此の點から彌生式土器の祖形を果實に求めることは縄文式土器の場合と同様である。その他鉢形・皿形・椀形・等も存する。然し縄文式土器の特徴とする注口土器の存在は全く認められず、その代りに高杯土器等が多數に發見されてゐる。甕棺の如きは大きさは一様ではないが普通は高さ一〇匁——四〇匁内外のものである。

文様に就て見ると器形と同じく簡素なものが多く、寧ろ無文のものが相當多いやうだ。前者には何れも共有する縄蓆文は、此の土器群には一般に使用されて居らぬ。又曲線文も使用されてゐない。該土器では浮沈兩様の條線を横に圍らしたもので、楕目の様なもので平行線や流水文等を刻したものが認められる。又袈裟襷文や重孤文・山形文・科格文等が用ひられてゐる。此の無文赤色土器は從來普通に發見されてゐたもので、屢々大形甕棺を伴ふ。

第二に文様のあるものは最近北九州から主として發見せられるに至つたもので、特に遠賀川を中心とする地方に群を爲してゐるやうだ、茲に此の一群の土器を或人は遠賀川式土器と呼んでゐる。併し中部九州、南部九州から出るものにも重孤文土器が存するから、文様上から見て直ちに之を遠賀川式土器といふのは穩當でない。而して無文土器と遠賀川式土器とを比較するに前者は縄文式土器の地方推移に依るもので第一次的に分布し後者は第二次的に分布したものと想はれる。それは中部以南に發見される有文土器と北九州の遠賀川式土器との相異によつて知られる。

さてこの彌生式土器は如何にして我九州に傳播して來たかについて考へて見るに、既に斯界の權威鳥居博士によつて大陸にその祖型が存在することが明瞭になつゐる。之が漸次南下渡來したものだらうと言はれてゐる。

實際朝鮮方面の石器時代の土器の一部と我が彌生式土器との間には相通するものがあり、その間に親縁關係の存することは否定することは出来ない。然乍ら有文土器で朝鮮のそれと比較するに、半島出の土器は列點等のある所謂楕目文系統のもので遠賀川式土器と甚だ似てゐる點があるが、南方の重孤文土器の存在は認められてゐない。されば之を以て直ちに朝鮮半島から傳播したものであると斷定することは出来ぬが兎に角同一系統のものであることは誰でも兩者の土器を照合して見た者には肯首出來よう。

一方無文土器に至つては北九州の無文土器は相當に發達したものがあり往々漢式の青銅器例へば銅鉾、銅劔等が伴つゐるから或は支那大陸から直接に渡來したものではあるまいかと考へられる。朝鮮半島から出る土器の伴出物で之に

類するものはあまりないとされてゐるから或は確定的なものかもしれない。要するに彌生式土器は大陸及び朝鮮半島から我が國の何處かに渡來し、それが九州に於ては一種獨特の進歩をなしたものと云へよう。

かく我國の金石併用時代は同時に出現した文化ではなく、またその内容についても青銅器を受容した西日本の彌生式土器使用者と、東日本の縄文式土器使用者との文化は著しく異つてゐたことが土器を通じて知られる。然し何れにせよこの文化の潮に撿乗して飛躍を遂げたのは彌生式土器を使用してゐた石器時代人であつたに違ひない。